共生の実相

命の線引きを問う

① ナチスの「安楽死」政策

命の価値 生産性で計られ

地下へと続く白壁の狭い階段の先に、ガス室はあった。ドイツ中西部・ハダマー。「価値なき生命の抹殺」を掲げたナチス・ドイツの障害者「安楽死」政策（T4作戦）の施設跡が現存し、記念館になっている。昨冬、日本障害者協議会の藤井克徳代表（70）と一緒に訪れた。

「緊張します。吸い込まれそうになる」。目が見えない藤井さんに続き、階段を下りる。左手のガス室はタイル張りの12平方㍍の空間。当時、一度に50人が「シャワーを浴びる」と詰め込まれた。外から鍵がかけられ、医師が一酸化炭素（CO）のガス栓をひねった。記念館の教育担当レギーネ・ガブリエルさん（63）は「優生思想の中で育った医師らは『価値なき命』という考えに疑問を抱かなかった」と語る。

藤井さんは言う。「裸にされ、ぎゅうぎゅう詰めで。ガスによって体が動かない中、だまされたと気づいたはず。そして『私で最後にして』と心の中で言ったと思う。人間の希望をつぶす残虐さが凝縮された空間です」

ナチスは1939年以降、T4作戦に着手し、障害者をガス室などで殺害した。被害者は20万人以上とも。ハダマーのガス室には半年強の間に約1万人が送られた。

藤井さんがガス室を最初に訪問したのは2015年。翌16年7月、相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害される事件が起きた。殺人罪などで起訴された植松聖被告（29）は「意思疎通のできない障害者の安楽死」を動機に挙げた。

厳しい経済情勢の中、「社会の重荷」とみなした人々を狙ったナチス。植松被告もまた社会保障費の削減を目的に、彼の目から見て「役に立たない人」を標的にした。藤井さんは「どちらも経済性、効率性、生産性といった社会にとっての価値を基準とした」と語る。

当時、被害者はバスで移送され、診察室を経て、流れ作業のような手順でガス室へ。食事やトイレの手間は省かれ、全てが1日で終わる。死亡後は同じ地下の焼却炉に。遺体を引きずりやすいよう通路には傾斜があり、特殊な加工がされた。そのツルツルとした床は今も鈍い光を放つ。叔母を亡くしたギーゼラ・プッシュマンさん（66）は「殺人が産業化された」と指摘する。

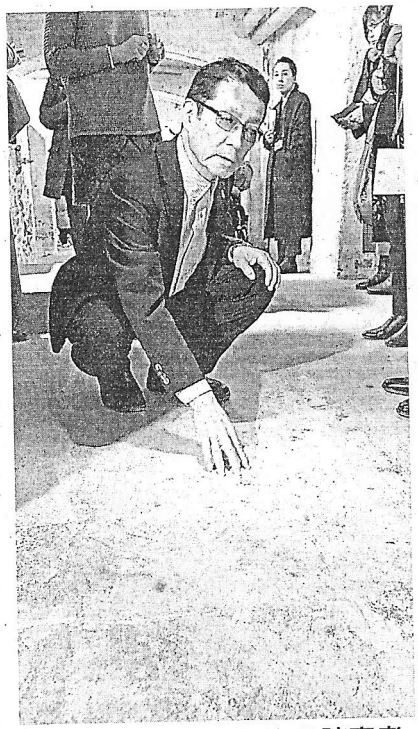
「現代は振り子が戻り、さらに生産性で計られる社会だ」。藤井さんは事件の教訓を探るために植松被告と対話する必要性を感じていた。

植松被告は、アクリル板の向こうで手の指先をピンと伸ばし、深く一礼した。今年2月、横浜拘置支所で面会した藤井さんに同行取材した。「今にして事件の日をどう思っているのか」。一瞬黙った植松被告は「ああ」と思い出したように言い「激しい一日だった」と続けた。細くうつろな目に一瞬、生気が宿った。

◇

相模原の障害者施設殺傷事件から7月26日で3年。重い障害がある人に対する「命の線引き」は特異な考えと片づけられるのか。歴史を直視し、被告と対峙する障害者。グローバルな医療界の動きに絶望感を募らせつつも、日々の暮らしの豊かさを模索する家族ら。「障害者殺しの思想」にあらがう人たちを追った。＝7回掲載予定です

障害者「安楽死」政策　ナチス・ドイツは1939年にこの政策に着手し、翌40年から各地の施設で障害者の虐殺を開始。死者は公式な資料に残るだけで7万人、実際には20万人以上とされる。ベルリンに置かれた本部の住所の文字を取り「T4作戦」と呼ばれた。優生思想に基づき精神科医を中心とした医師が主導。一部は戦後ニュルンベルク医者裁判で裁かれた。



ドイツ・ハダマーにある障害者「安楽死」施設跡で、遺体を引きずりやすいように加工された通路に触れる藤井克徳さん＝2018年11月